opusdei.org

黙想:使徒聖ヨハネ 福音記者(12月27 日)

黙想のテーマ:「イエスに愛された使徒」「私たちに対する神の忍耐」「イエスが愛するように愛する」

イエスに愛された使徒

私たちに対する神の忍耐

イエスが愛するように愛する

ペトロとヨハネはマグダラのマリア の言葉を聞き、主のいない墓に急ぎ ます。第四福音書のこの場面でヨハ ネは自身のことを「イエスが愛して おられた」(ヨハネ20・2)弟子と呼 びます。今日は聖ヨハネの祝日で す。なぜヨハネはキリストが愛して おられた弟子、お気に入りの弟子 だったのでしょうか?それは最も若 かったからでしょうか。あるいは特 別の愛情を必要としていたからで しょうか。それとも彼の激しい性格 のためだったのでしょうか。あるい は単にイエスがそのようにお望み だったからでしょうか。いずれにせ よ、聖ヨハネは主から自分が紛れな く愛情を受けていることを確信して いました。

しかしながら、私たちは皆、自分が 唯一で排他的な特別な形で神から愛 されていると言うことができます。 それは、私たちに対する主の愛の神 秘的な一面です。私たちはこのこと

を信仰によって知っていますが、 時々私たちの心は、このことを信じ ることに抵抗を感じることがあるか もしれません。しかし実のところ 「神は一人ひとりを、不道徳な人を も、ずっと愛してくださっている、 降誕祭はそれを思い起こさせてくれ ます。わたしに、あなたに、わたし たち一人ひとりに、今夜あのかたは こう言っておられます。『わたしは あなたを愛しています。これからも ずっと愛し続けます。かけがえのな い、大切な子だから』」「エプ。「主 は、わたしたちの一人ひとりを、主 との個人的な友情のうちに生きる弟 子にしたいと望んでおられるという ことです。このような弟子となるた めには、外的な意味でイエスに従 い、そのことばを聞くだけでは不十 分です。イエスとともに生きること、 また、イエスのように生きることが 必要です。このことは、心からの完 全な信頼に満ちた、きわめて親密な 関係があって初めて可能になりま

す。こうした関係が見られるのは、 友の間においてです」[2]。

イエスは、ヨハネを選ばれたとき、 その激しい性格を完全にご存知でし た。例えば、サマリアの村が主を受 け入れなかったとき、この愛された 弟子は主に尋ねます。「お望みな ら、天から火を降らせて、彼らを焼 き滅ぼしましょうか」 (ルカ9・ 54)。他の折に、自身の判断に確信 をもっていたヨハネは、彼らの仲間 でない人が悪魔を追い出すのを止め させようとしたと、イエスに報告し ています(マルコ9・38参照)。イエ スはいつも忍耐強くヨハネの言葉を 聞きます。主は、あの焼き尽くすよ うなヨハネの熱意を正しい方向に導 き、真の愛徳の種が彼の心に育つよ うにするために、どれだけ時間をか けたことでしょう。「時に、歴史の

中で、また私たちの心の中で働かれる神の忍耐力に、私たちが抵抗を示すことがあります。それは全てを今すぐただちに判断する人々の性急さです。こうして私たちは〈小さい〉けれど最も美しい徳である希望を失ってしまうのです」[3]。

ヨハネは、主の教えをしっかり学び 取りました。愛されていることを熟 知していたからです。福音書はヨハ ネに起こった変化を記録に残してい ます。例えば、今日読まれる墓へと 走るヨハネは、以前と比べ気性の激 しさをコントロールできているよう に見えます。彼はペトロを待ってか ら墓に入るのです。「それから、先 に墓に着いたもう一人の弟子も入っ て来て、見て、信じた」(ヨハネ 20.8)。晩年には、初代信者たちに 福音のメッセージの核心をたゆまず 繰り返します。「愛する者たち、互 いに愛し合いましょう。愛は神から 出るもので、愛する者は皆、神から

生まれ、神を知っているからです」 (1ヨハネ4・7)。聖ヒエロニムスに よると、ヨハネがその晩年に弟子た ちから、どうしてこのことをしつこく繰り返すのかと問われた時、こう 答えたと言います。「なぜなら、これが主がお命じになったことだか ら、そしてこれを果たすだけで十分 です」[4]。

聖ホセマリアは「互いに愛し合いな さい」と繰り返していました。「互 いに愛し合いなさい。このように皆 さんに言うのはそれが、です。Deus caritas est (1ヨハネ4・8)、神はをを なっているでしょう」「5」。キリスト神 でしょう」「5」。キリスト神を のメッセージは「わたしたちがしたしたちの罪を償うい けにえとして、御子をお遣わしになりました」(1ヨハネ4·10)という言葉に要約されます。それゆえ、キリスト信者にとって、すべての人は神の無限の愛情の対象なのです。

「神は、御子をお与えになることに より、わたしたちよりも先に来られ ます。 (…) 神はいつも新たにわた したちとともに歩み出してください ます。むしろ神はわたしたちが神と ともに愛することを待っておられま す。神はわたしたちを愛してくださ います。それは、わたしたちが神と ともに愛する者となり、そこから、 地上に平和をもたらすことができる ためですして、サマリアの街を焼き 尽くす火の雨を望んだ後、ヨハネは イエスとサマリアの女性が出会う場 面について語ります。福音記者の中 でこの場面について語るのはヨハネ だけです。これはイエスが、父なる 神が皆を愛するようにすべての人を 愛さなければならないことを、ヨハ

ネに何度も説明したことの実りの表れなのかもしれません。

ヨハネは、イエスから聖マリアの 話を記された弟子です。誰が誰も 話をしたのか、おそらに使通したの がはたことでしょう。御子を通したことでしまう。 でしたことを眺めたマリアの頼みを果て でした。神が私たちのように他 ました。神が私たちるように まうこのでないましょう。 とヨハネに助けを頼みましょう。

- [1] フランシスコ、降誕祭ミサ説 教、2019年12月24日。
- [2] ベネディクト16世、一般謁見演説、2006年7月5日。
- [3] フランシスコ、説教、2021年2月2日。

- [4] 聖ヒエロニムス、ガラテヤ人へ の手紙注釈3,6。
- [5] 聖ホセマリア、1964年3月19日の 家族の集まりでの言葉。
- [6] ベネディクト16世、2010年12月 24日降誕祭ミサ説教。

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/meditation/mokusou-koutan-1227/(2025/12/17)